『西南アジア研究』No. 34, 1991

ウイグル文『阿毘達磨倶舎論実義疏』の性格について

庄垣内正弘

0.

ウイグル文献中,大量の行数を保有しながらもなお具体的内容の明らかにされていない文献が『阿毘達磨倶舎論実義疏』である。1925年に羽田亨が概要について述べて以来,内容に関するまとまった研究は発表されていない[1]。この文献の翻訳原典であった漢文が極めて少量にしかのこされていないこと,また書かれたウイグル語が極端な擬漢文体で,語順についてはウイグル語文法が適用できないことが研究を遅らせる主な原因であった。

『阿毘達磨倶舎論実義疏』(Abhidharmakośabhāṣya-ṭīkā Tattvārthā)は,世親(Vasubandhu)の著した『阿毘達磨倶舎論』に対する注釈書の一つで,安慧(Stiramathi 510-570, 480-540?)によって作られた。サンスクリット原典は消失し,漢訳本も一部をのぞいて見つかってはいない。ただサンスクリットからのチベット語訳がのこされているが,書かれたチベット語が難解なものであることから,研究はあまり進んでいない。

ウイグル文『実義疏』は,敦煌の千仏洞(ペリオ編号の181窟あるいは182窟)から見つかった冊子本で現在は大英図書館に保管されている。文献番号 Or. 8212—75A/B を付けられている[2]。75A に対して75B は若干異なった性格をもっている。ここでは75A を中心にウイグル文『倶舎論』について,漢訳あるいはチベット語訳と比較しながらその性格について述べてみたい。

1. 漢訳『倶舎論』との対応

ウイグル文『実義疏』が漢文『倶舎論』のどの部分の注釈であるかについては,すでに羽田亨による指摘がある[3]。同氏の指摘は一部をのぞいては正確なものであった。すなわち,今「大正新脩大蔵経」の玄奘訳『阿毘達磨倶舎論』(No. 1588)に従うと,1頁上段(a)『倶

舎論』第一巻「分別界品第一」の巻頭から，2頁中段(b)5行目の「如是等類是有漏法随義別名」までの内容に対する注釈を表す。ちなみに75Bは『倶舎論』第二巻「分別界品一之二」に所属する，9頁下段(c)の頌「応善調伏心　心調能引楽」の直前にはじまり，12頁下段(c)の，「眼不下於身　色識非上眼‥身識自下地　意不定応知」の釈文がつづく13頁上段(a)までの内容に対する注釈を含む。

75Aについてもう少し詳しく説明するなら，写本の初頭は「阿毘達磨倶舎論実義疏巻第一」にはじまり，末尾も同じものが漢字で書かれ，更に同様の内容がウイグル語で繰り返されている。このことはこの75Aがウイグル文『実義疏』の第一巻であったことを一応示している。実際この写本が注釈した『倶舎論』の内容，すなわち巻頭から「如是等類是有漏法随義別名」までは完結したものである。仮に，「国訳一切経」の分類を借りると，『倶舎論』の総序と本論第一篇「界品」の第一章「諸法の有漏·無漏及び有為·無為分別」の全てを含む[4]。後に述べるようにこの写本の翻訳原典であった漢文『実義疏』の第一巻と対応する可能性は大きい。またテクスト2581-2583行目には次のような文があらわれる。

上弁異説竟 üsdürdi bärü öngi söz-lädäči-lärig uqïdïp ärtdi.

abïdarmavat tukädi　了也　　善哉　莎土　　印於初卷了了也。

第二　bašladï ymu ∷

全体は，「上に異説を弁じ竟えた。阿毘達磨論(abhidharma-vāda)は了った。善哉　莎土。初巻を印し了った。第二(巻)が初まった！」を意味する。これに先行する内容は『倶舎論』の第1頁中段(b)27行目「‥‥毘婆沙師伝説如此」までの注釈であるが，この部分はちょうど『倶舎論』の「総序」に該当している。ウイグル文ではこの「総序」を以下の本論と区別して「初巻」と付したのである。なお，ウイグル文『実義疏』の引用する漢文『倶舎論』は玄奘訳のものと基本的に一致している。ウイグル文の翻訳原典であった漢文『実義疏』は多分，玄奘訳『倶舎論』を引いたものと考えられる。

2．漢訳『実義疏』との対応

かつて羽田亨がパリ国民図書館で発見した漢字巻子本，『倶舎論実義疏』は『実義疏』五巻までを含んでいる。しかし，極端な節略抄本で，全体を合わせても，「大正大蔵経」の3頁と3分の1頁分しかない[5]。第一巻と第五巻には若干の長行をとどめているが，第二，三，四の各巻はほとんどが『倶舎論』の中の頌を抜粋して並べたものである。したがって，羽田亨も，その初頭にあらわれる題目と著者さらに帰敬の頌がウイグル語訳の初頭と一致することについては認めたものの，全体に関しては，「全く安慧の作とは認め難い」と述

べられた。この見解は，チベット語訳『実義疏』とこの漢訳節略本との比較からすでに否定されているが[6]，実は帰敬の頌以外にも多くの部分がウイグル語訳と一致することがわかってきた。たとえば次の説話は漢文『実義疏』の第一巻に現れて，ウイグル文とよく対応している。

昔迦葉佛時有一苾芻。聰明博學具閑三蔵。嘗以語業毀罵出家在家人等。為鵄鴞魚狗諸禽獣等。命終之後。承此業報。生於海中。受大魚身。其形甚大。有十八頭具受衆苦。世尊出世猶未得脱。後有漁人。其數一千。困捕魚次。網著此魚。曳之不出。後數千人同共曳出。見其異類多頭形貌可怖。世尊観見知具報終。遂将大衆至彼海岸敷座。坐巳呼彼魚云。三蔵。汝豈不是過去佛時三蔵苾芻。彼魚聞巳涕淚盈目。爾時世尊為説宿因。其魚生悔更不飲噉。因茲命終生於天上。於彼時中聞法之衆各於自乗獲大法利

[大正第二十九巻 325頁]

öngrä ‖ kašïp tngri burxan ödintä bar ärti bir toyïn tidik yaruq bilgä biliglig ‖ king bilmäklig tüzü tükäl urqmïš ärti üč aγïlïγ-larïγ 常以口業 ‖ uzadï til-täki qïlïnč üz-ä irär münäyür ärti. alqu kiši-lärig. ‖ täglükän. balïq. quš. it. äsringü uγuš-luγ quš käyik tip. kin bu qïlïnčïnga tayaq-lïγ-ïn. tuγup taluy ögüz-tä tägindi uluγ balïq ät'öz-in ‖ anïng ät'öz-i king uluγ säkiz ygrmi baš-lïγ. tüzü tükäl tägindi alqu ‖ ämgäk-lärig. adï ködrülmiš ündüktä bälgürdüktä yirdinčü-tä anïlayu oq bolmatï ozγalï. kin bar ärti balïq-čï kiši anïng san-ï mïng balïq ‖ tudγu tïlda γ-ïnda basa toor yadïp 此魚拽之不出 bu balïq-ïγ tar ‖ -tïp ündürmätin kin san-ï mïng kiši-lär birgärü birikip tardïp ün ‖ -dürüp kördi-lär anïng üküš tälim bašïn körki-ning oxšadïγ-ï-nïng qorqïnčïγ-ïn adï ködrülmiš qolulap körüp. bilip anïng tüš-i-ning ‖ üzülmiš-in ärü ärü uduzup uluγ quvraγ-ïγ. tägip ol taluy-nung ‖ qïdïγ-ïnga. orun töldäp oluru tükätdüktä oqïyu ol balïq-ïγ söz ‖ -lädi dripidakï-y-a sän näčük'ol. ärmäz mü ärding ärtmiš ödki burxan. ‖ ödindäki dripidakï toyïn tip. ol balïq äšidü tükätdüktä köz-indä ‖ tolu yaš-ï kölärdi. adï ködrülmiš nomladuq-ta öngräki ažun-taqï tïldaγ-ïn ol balïq köngül-indä tuγurup ökünmäk qïnanmaq-ïγ. ikilayü ‖ ičmädin yimätin munung tïldaγ-ïnda ölüp tuγdï tngri yir-indä ‖ 彼時聞(法)之衆 ol ödtä nom äšidigmä quvraγ öngin 々 öz

kölüngü ‖ -lärinčä. buldï-lar nomluγ asïγ-ïγ tip.

[2485-2506行]

「昔迦葉仏時に,一苾芻がいた。聡明な智をもち,博学で,三蔵を完全に了じた。常に語業を以って,すべてに人,鵄鴞,魚,狗,各類の禽獣を毀つのであった。後にこの業に依って,海に生まれ,大魚身を受けた。其の身は甚大,十八頭を有し,衆苦を俱受した。世尊が世に出現したとき,なお,脱しえなかった。後に漁人が有った。其の数千。魚を捕るべき因において,次に網を広げて,この魚を曳いたが出せなくて,後に千人の人々が共同して曳き出して,其の多頭を,形貌の恐怖を見た。世尊は観見して,その報いの終末を知って,ついに大衆を将いて,彼の海岸へ至り,敷座をなして,坐りおえたときに,彼の魚を呼んで言った,三蔵よ,汝はどうして過去仏時の三蔵苾芻ではなかったのか。彼の魚は聞きおえたとき,目に涙が溢れた。世尊が宿因を説いたときに,其の魚は心に悔を生じて,更に飲食せず,この因で死に,天上に生まれた。彼の時に法を聞く衆は各々,自乗によって,法利を獲た,と。」

ところで,節略本第一巻末は頌で終わっているが,ウイグル語訳はこの頌のあらわれる4243行—4245行以降,写本末までになお300行以上を残している。写本末には先に述べたように,「阿毘達磨倶舎論実義疏巻第一」を表す一文が書かれている。すなわち『実義疏』第一巻末である。一方,節略本の第二巻は「諸仏出現楽　演説正法楽　僧衆和合楽　同修勇進楽」の頌に始まるが,これは『倶舎論』「界品」の「第二章」の四つ目の頌[大正29巻：2c]にあたる。ウイグル文は「界品」の「第一章」末の注釈に終わっているのでこの頌は含まない。もちろん,節略本第一巻末と第二巻初頭までの間に,元はかなりの量の漢文が詰まっていたものと考えられる。そしてその部分には「界品」の「第一章」末の注釈が有り,漢訳『実義疏』の第一巻末を構成しており,ウイグル文の巻末と一致していたにちがいない。なお,チベット語訳はこの部分を特に巻末とはしていないので,区別は漢文において作られたものであろう。

3.チベット語訳との関係

チベット語訳『実義疏』はサンスクリット原典から直接に翻訳されたもので,15世紀後半から16世紀の間に行われたとされている。しかし,もとのサンスクリット原典が粗悪なものであったのか,訳者の技量が及ばなかったのか,その何れにしてもチベット訳文は

十分なものではない。しばしば難解なサンスクリットが訳出されずに文中に残された状態にある。したがってチベット語訳の全体の内容が提出されるまではなお相当の期間が必要とされている。だが,現在の研究段階でウイグル語訳との関係はおおよそ把握できる[7]。

両者の内容には基本的一致がみられ,共に安慧のサンスクリット原典の内容を伝えていることは確かである。しかし,構成法や内容の詳細においてはかなりの相違が認められる。

まず,ウイグル語訳では先に述べたように『倶舎論』の総序と本論とを区別しており,末尾には巻末を表す一文が掲げられているけれど,チベット語訳にはいずれの印もみられない。次に,ウイグル語訳では『倶舎論』からのまとまった文を引用して掲げ,その引用文からさらに短い語句を抜いてそれを注釈していく形式をとっているが,チベット語訳では通常,『倶舎論』からの長文を掲げることはしない。また,ウイグル語訳はチベット語訳にはみられない「問答」の形式をとる。これら構成法の違いは総序と本論の区別のようにウイグル語訳における作成と考えられるものもあるが,他はもとの漢文の形式との相違である。

内容の違いとして,ウイグル語訳はチベット語訳と比べて注釈がはるかに詳細で,量的にも優っている。ウイグル文にある多くの引用文がチベット語訳には現れない。また,チベット語訳が『倶舎論』初頭の頌とその釈から始まるのに対して,ウイグル語訳では,それに先だって帰敬の頌が掲げられ,続いて『倶舎論』の「界,根,世間,業,随眠,賢聖,智,定」の八品次第の道理が説かれている。

チベット語訳は原典を忠実に翻訳していると考えてよいので,上に述べたようなウイグル語訳の構成や内容は後に変改されたものであると推定できる。変改は,サンスクリット原典に若干の解説を付加することによって内容理解の助けをなしたものである。ウイグル語訳にはしばしば疏主「安慧」が三人称で現れるところから判断して,このウイグル文『実義疏』はもとの『実義疏』を講義した,いわゆる「講義録」の性格に近いものであったと考えたい。ウイグル文に一貫している擬漢構文の使用からみて,この「講義録」は当然のこと漢文において作られたものである。

以下にこれらの内容をよく表しているといえる二つの文例を掲げておきたい。

〈チベット語訳〉

もし如来によって「出家した老人は三蔵を獲得することはむずかしい。」と(契経に)説かれているから,(アビダルマは)仏陀によって説かれた法であると言うならば,雑蔵

(kuṣdra-piṭaka)が意にかなう(ābhiprāyika)言葉である。もしこれ(雑蔵)は経でないから,(三蔵の一つとして立てられる)と言うならば,これはそうではない。何故ならばそれは経たるものと立てられるからあるいは経の差別であるからである。

もし汝の主張するアビダルマと同じ様に(雑蔵は)アビダルマと相違はないと言うならば,それは十二分教に集められていないから,仏陀によって説かれていないという過失におちいる。もし経という言葉で説かれていないから,(雑蔵は)経ではないと言うならば,geya等もまた経ではないものであり三蔵に集められていないものであり,仏陀によって説かれていないという過失におちいる[松濤 1990: 9]。

〈ウイグル語訳〉

また,衆賢師言う,「アビダルマは確かに仏が説いたものである。仏は三蔵教を摂受した故。ちょうど世尊が,老耄の出家したものよ,吾が三蔵教を汝が持することは甚だ得難いのである,と説いた。それで世尊が説くことによって,三蔵有りと,知らねばならない。アビダルマは確かに仏が説いたものと知るべし。仏がもしアビダルマを説かなかったなら,如何にして三蔵を有することができた」と。安慧師言う,「世尊の三蔵というのは雑蔵について説いた。ちょうど第一に経,第二に律,第三に雑蔵である。アビダルマを説かなかった故に,それで証とならない」と。また衆賢師言う,「もし雑蔵が第三であるというなら,その義も正しくない。如何にしてというなら,すなわち(雑蔵は)経であるため」と。安慧師言う,「この汝らの説くのは正しくない。もし雑蔵が経であると説くなら,四阿含において何処に住して摂せられる。これもまた経の差別である,と。もし経の差別でないと説いても,すなわち十二分教に与えた法において(雑蔵は)摂せられない。もしそこに摂せられないなら,仏の説いたものでなくなるにちがいない」(と)[2426-2443行]。

この例文から理解できるようにウイグル文は衆賢や安慧の言葉を明示し,説明も詳細でわかりやすい。下線部は節略漢文『実義疏』にも現れる:「三蔵一経二律三雑蔵」[大正二十九巻:325c]。このようにウイグル語訳が節略漢文『実義疏』と一致し,チベット語訳と対応しないところは他にもみられる。たとえば先に掲げた説話もチベット語訳には現れないし,次の文にもそれを認めることができる。

〈チベット文〉

また「経に依止すべきである」と説かれている。ここで依止という言葉は量の意味では

ない。それではどうかと言えば，初めに無我と非衆生(niḥsattva)と無プトガラ(niḥpudgala)に依止して，今や経を忘れることがないように一生懸命になるべきだというのが，この意味である。この様にすれば，またいかなる前提についても過失を説くことはない。それはまたどの様なことかと言えば，この前提の効能についても過失を説くことはないと解釈されるのである[松濤 1990：7-8]。

〈ウイグル文〉

衆賢がまた言うには，『今，汝ら依るべしと言うことによって，もし量の義を顕わすというなら，その理は必ずや正しくない。如何にして世尊は先に四種の量を説いて，而して，今，経を量と為すと説くのであろう。或は応に，先の時に依を唯一つのみなりと説くべきであった。如何にしてというなら，法等の三つは経において，摂せられた故に。或はすなわち，そこにおいて，人へ依ることに遮って，また，すなわち経の差別へ汝ら依るべしと勧めた。ちょうど仏は阿難へ告げた，我は今，世に健在であるので，汝ら我に依るものである。我が滅度した後，汝らには別の所依は無い。応に経へ依らねばならない。決して忘失させることなしに，と』。如何にして，ただ，経へ依ることを説いて，而して余の律，論等へ依ることを説かないのだろうか，と。もしこのようにいうなら，すなわち汝ら経量部の何の過失を上らせることができるか。ちょうど仏が説かれた，阿難よ，汝ら先に人に依るものであった。我が滅度した後，別の依は無いのである。唯，経に依るべし。決して忘失させずに，と。意趣によって，阿難のもののごとく，経へ依ったことを，余へ依らなかったことを顕わすというなら，ここにおいて何の過失となるか[テクスト Nos. 2351-2373]。

『　』内は順正理論からの引用であるが，下線部はチベット語訳に一致しない。一方，この部分は節略本と符号する。

又今言依。欲顕何義。若顕量義。理未必然。如何世尊先説四量。而今但説経為量耶。或応先時依唯説一。以法等三経所摂故。或即於彼已遮依人。亦即勧依経之差別。而今復説有唐捐過。故今言依。応顕別義謂汝昔来心属於我。是則依仗補特伽羅。自今以往無別所依。応唯仗経勿令忘失。[順正論：330a, 7-13]

仏告阿難。我在依於我。我滅度無別所依。応依杖経。勿令忘失。[実義疏：325c, 9-11]

このように，漢文節略本はチベット語訳より，むしろウイグル語訳と明確な一致を示す。

4．二種の漢訳『実義疏』の関係

節略抄本であるパリ本漢文『実義疏』がウイグル語訳とよく一致していることは上に述べた。一方，北京図書館本漢文『実義疏』は残念ながらウイグル語訳とは重ならない。しかし北京本とパリ本との関係はウイグル語訳版の性格を知る上で重要である。

北京図書館所蔵の漢訳『実義疏』断片は55葉1322行を保存し，漢訳『実義疏』の第三巻に所属する[8]。巻末を保有し，巻首を欠いている。漢訳『倶舎論』の第一巻にある頌「聚生門種族　是蘊処界義」[大正二十九巻：4c]につづく長行の注釈の途中から始まる。最初に現れる『倶舎論』からの引用は「(染汚)名劣不染名勝」[4c 23行目]である。巻末は『倶舎論』第二巻にある頌「謂唯外四界　能斫及所斫　亦所焼能称　能焼所称諍」[大正：9a]につづく長行の末尾である，「或復有説。唯有火界可名能焼。所称唯重。」[大正：9a，15-16行目]の注釈に終わる。「国訳一切経」の章だてを借りるなら，『倶舎論』本論第一篇「界品」第三章の第三節の途中から，第五章の第八節末までの注釈を表したものである[9]。

パリ節略本の第三巻の内容も北京本の内に収まる。すなわち，北京本と同じく「聚生門種族　是蘊処界義」につづく長行に対する注釈に始まる。末尾は『倶舎論』[大正：8a-b]の頌「説五無分別･･･意諸念為体」につづく長行に対する注釈の途中で終わるが，パリ節略本第四巻が北京本第三巻の最後にあらわれた上掲の頌につづいて現れる頌「内五有熟養声無異熟生･･」[大正：9a]に始まっているので，パリ本が節略したもとの漢訳本第三巻もこの頌の前で終了していたと推定できる。この節略本のもとの本が北京本と同種のものであったか否かは今の段階では決定し難い。パリ節略本第三巻の初頭部分は，辛うじて数行の長行を保っているので，それと北京本を以下に比べてみたい。

「心心所法生長門義是処義。訓釈詞者。謂能生長心心所法故名為処。是能生長彼作用義。」「法種族義是界義。如一山中有多銅鉄金銀等族説名多界。如是一身。或一相続有十八類諸法種族名十八界」[倶舎論　大正：5a，2-7行目]

この『倶舎論』の内容を，北京本『実義疏』は次のように注釈する。

論，「心々所(法)生長門義是処義訓釈詞者謂能生長心々所(法)故名為処是能生長彼作用義」釈曰，何故言処是生門義生誰々(？)門以訓釈詞故前生門義生誰々(？)門生心々所法生長門義是処義訓釈詞者如論中云謂能生長心々所法故名為処是能生長彼作用義作用義者如依眼色生於眼識乃至意識応知亦然『如契経説梵志当知以眼為門唯為見色此経唯証門義有

六然心所法有十二門故契経説眼色為縁生於意識三和合触起受想思』　論,「法種族義是界義如一山中有多銅鉄金銀等族説名多界如是一身或一相続有十八類諸法種族名十八界」釈曰,如是知族是其義‥[北京本　第3,4葉]

一方,パリ節略本は次のごとくである。

三科一聚二生門三種族。聚蘊義。生門義。心心所法生長門義。生於眼識以眼為門。『此経証門義有六。然心所法有十二。故契経説。眼色為縁生於眼識。三和合。触起俱受想思如是。乃至意法為縁生於意識三和合。』　種族義是界義。如一山中有多銅鉄金銀界族説名多界。如是一身或一相続。有十八類。諸法種族名十八界。[パリ本　大正二十九巻：326b]

『倶舎論』からの引用を「　」で示した。下線を施した部分,すなわち両『実義疏』に一致する部分が,論に対する注釈部分において,よく一致していることがわかる。『　』に閉じた部分は『順正論』からの引用である。

『心心所法於中生長。故名為処。是能生長彼作用義。如契経説。梵志当知。以眼為門。唯為見色。此経唯証門義有六。然心心所法有十二門。故契経説。眼及色為縁生於眼識。三和合触起受想思。如是乃至。意及法為縁生於意識。三和合触俱起受想思。』[順正論　大正二十九巻　343c]

この『順正論』からの引用を比べてみれば,パリ本が北京本には現れない部分を含んでいることがわかる。

上記のことから,パリ節略本の元の漢文は北京本と完全に一致するというものではないが,かなり近い内容をもつものであったことが理解できる。

5.結語

ウイグル文『阿毘達磨倶舎論実義疏』は,サンスクリットから直接翻訳されたチベット語訳と比べて内容表現には工夫がほどこされ,解説の量も多い。これは翻訳原典であった漢文において行われたもので,『実義疏』の「講義録」とよべる性格のものであった。また,節略抄本としてのこされている漢文『実義疏』はウイグル文とよく一致すること,北京本漢訳『実義疏』(第三巻)とごく近い関係にあることがわかった。

この論文は Colloquium on Central Asian Philology(The International Institute for Buddhist Studies, 1990年6月25日)で口頭発表した内容をもとにして作成した。

注

1) 羽田亨「回鶻訳本安慧の倶舎論実義疏」『白鳥博士還暦記念東洋史論叢』(1925),『羽田博士史学論文集』下巻, 1975。羽田亨以後の研究として次のものを挙げることができる。Ş. Tekin, *Abhidharma-kośa-bhāṣya-ṭīkā tattvārthā-nāma, The Uigur Translation of Sthiramati's Commentary on the Vasubandhu's Abhidharmakośaśāstra : abidarim koṣavardi ṣastr. I*, Text in Facsimile with Introduction, 1970, New York, pp. Ⅸ-Ⅹ. 百済康義「ウイグル訳アビダルマ論書に見える論師・論書の梵名」『印度学仏教学研究』31(1), 1982,「サンスクリット文法のウイグル語訳例」『龍谷大学論集』431, 1988。K. Röhrborn, Zur Terminologie der buddhistischen Sekundärüberlieferung in Zentralasien, *ZDMG* 133(2), 1983. 庄垣内正弘「ウイグル文『阿毘達磨順正理論』—大英図書館所蔵 Or. 8212-75B から—」『内陸アジア言語の研究』Ⅲ 神戸市外国語大学外国学研究所, 1988,『ウイグル語・ウイグル語文献の研究Ⅲ—ウイグル語訳・安慧造『阿毘達磨倶舎論実義疏』〈テクスト1〉』神戸市外国語大学外国学研究所, 1989, 同Ⅳ〈テクスト2〉, 1990。

2) 旧番号ch. XIX, 001 ch. XIX, 002. なお, この写本の体裁に関しては, A. Stein, *Serindia*, vol. Ⅱ(1921, Oxford p.925)を参照。

3) 羽田前掲書152-153頁。

4) 「国訳一切経」(毘曇部二十五) 1-12頁。

5) 大正第二十九巻　No. 1561, 325-328頁。

6) 桜部建「アビダルマ論書雑記一, 二」(二)国訳一切経月報・三蔵105.

7) チベット語訳からの若干の和訳が提出されている ; 宮下晴輝「倶舎論註釈書 Tattvārthā の試訳—第七章第一偈から第六偈まで—」『仏教学セミナー』38, 1983. 松濤泰雄「アビダルマ仏説論—Tattvārthā を中心として—」『法然学会論叢』7, 1990, この中で扱われたチベット文はウイグル文(75)の1961-2480行に対応する。また, 同氏の「Tattvārthā について—有為は言依であるをめぐって—」『印度学仏教学研究』38(1), 1989は3990-4142行に対応する。

8) 『敦煌劫余録続編』北京図書館善本組(1981)1440番, 214頁。

9) 「国訳一切経」33-74頁。

(1990年9月30日成稿)